

連帯の幻想と孤独の現実

アンダーソンが予言し、カウリーが検証した 1920 年代のニューヨーク

藤野 功一

序

野心を抱いてニューヨークにやってきた個人は、いつか都会に生きる人々との交流を楽しむものの、結局は、信頼するに足る連帯を失って孤独へと陥る運命をたどる。このようなニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実につながる文学的イメージは、アンダーソンの短編“Loneliness”(1919)によって予言的に描かれて以来、1920年代のフィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナーといったモダニズム作家たちの代表作におけるニューヨークの描写によっても補強されてきた。だが、これらの作家たちはいずれも、マンハッタンを中心としたニューヨークの世界を、外側から冷ややかに見る立場で描いている。

果たして、1920年代をニューヨークの内側で過ごした人々は、実際にどのような連帯を経験し、そして連帯を失ったとすれば、どのように失ったのだろうか。ここでは、マンハッタンで20年代を過ごし、文学的ニューヨークの実態をつぶさに眺めてきたカウリーの *Exile's Return* (1934)に拠り、ニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実が、どのようなものであったかを論じる。

1. アンダーソンの短編“Loneliness”の予言

まずアンダーソンの短編“Loneliness”で、野心にあふれた若者がニューヨークにやってきた後に迎える運命がどのように描かれているかを確認しよう。この短編の語り手イーノックは、若い頃、21歳の時に画家としての成功を夢見て、自分の故郷であるオハイオ州ワインズバーグを出てニューヨークへ向かい、そこで15年間を過ごしたのち、夢破れて故郷へと帰り、孤独な老人となる。ニューヨークにやってきた若い芸術家の陥りがちな運命を寓意的な表現の中に描き出したこの短編は、連作短編集 *Winesburg, Ohio* 全体のなかでも重要な役割を与えられている。イーノックは、*Winesburg, Ohio* の主人公ウィラードに自分の都会生活の悲劇的な顛末を語り、その内容は、作家志望の若者としてこれから都会に出て行く主人公が陥ってゆくかもしれない行末を暗示する。ただ、この短編は、イーノックの悲劇の原因は彼の性格にあったとも読めてしまうため、ニューヨークという都会の社会構造の問題を具体的に明らかにしているとは言えないだろう。

2. 1920年代のモダニズム作家たちの代表作におけるニューヨークの描写

アンダーソンの短編が発表された後、1920年代に書かれた3つのモダニズム小説の代表作に出てくる登場人物たちも、ニューヨークという大都市のシステムに翻弄される。『グレート・ギャツビー』の語り手ニックは、過去にこだわらずに新たな人間関係と金儲けのチャンスを利用できる人間が成功するニューヨークの都会に適應することができず、ギャツビーの死に衝撃を受け、幻滅と共に故郷へと帰る。『日はまた昇る』において、コーンは、ニューヨークの軽薄なビジネスのつながりと恋愛関係にほだされて、それまで自分を支えてくれていた恋人を捨てて新しいロマンスに走り、語り手ジェイクから徹底的に軽蔑される。また、『響きと怒り』において、ニューヨークの綿花相場に投資をして損をこうむるジェイソンは、ニューヨークの絶えず流動してゆく経済を見抜くことができず、あたかもニューヨークには固定化した金儲けの社交界があって、そこで陰謀のようにすべての市場が操作されているのだ、という幻想を持つ。いずれの場合も、20年代のニューヨークの新たなシステムに人間が翻弄される状況を批判的に描き出している。

ただし、これらの作品は、都市をその内側からではなく、外側からの視点で描いているため、20世紀初頭のニューヨークの具体的な人間関係や社会構造に関しては、暗示的な言及で終わってしまうか、あるいは具体的な描写を欠いていると言えるだろう。これらモダニズム文学の代表作で描かれているのは、どれも外側から皮肉な気持ちで都会を眺めている者たちが垣間見た都会の人間関係の描写でしかない。そのため、これらの作品において、ニューヨークの生活が惨憺たるものに見えてしまうのも当然だろう。しかし、そういう偏見に満ちた見方をしている限り、1920年代に多くの人々を惹きつけた大都会ニューヨークの実態が見えてこないことも確かだ。多くの若者を惹きつけた、大変魅力ある都市であった1920年代のニューヨークに出現した都市の社会構造はどういうものだったのか、ニューヨークの内側で生きるとは実際にどういうことであったのかを明らかにすることが重要になるだろう。

3. カウリーの *Exile's Return* によるニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実の検証

1920年代にマンハッタンの内側で生きることがどういうことであったかを検証するために、実際に作者が20年代のニューヨークの内側で生き、そこでの人々の成功と没落をまのあたりにし、都会の人間関係と孤独の状況を具体的に描写した文学作品、カウリーの *Exile's Return* の内容をみてみよう。

カウリーの *Exile's Return: A Narrative of Ideas* (1934; rev. ed. published 1951 under the subtitle *A Literary Odyssey of the 1920's*) は、当世一流の書き手であり編集者であったカウリーによる1920年代のニューヨークの事後検証の書である。カウリーはハーヴァード大学在学中に第一次世界大戦に従軍したのち、戦後奨学金を得てパリで学んだのち、1923年に24歳でニューヨークに野心に燃えてやってきた、典型的な作家志望の青年であった。

その頃のニューヨークはカウリーと同じように野心を持った若者たちで溢れていた。1920年代の好景気は、ニューヨークで才能だけを武器にして暮らす若い芸術家たちに有利に働き、出版社の隆盛とともに、文章の書き手が求められ、書けばそれなりの原稿料がもたらされた。さらにその時期のニューヨークでは、知識人の理想的な生活が実現したかのようにさえ見えた。あちこちに小さな文学的サークルが出来上がり、彼らはそれぞれのお気に入りのレストランやサルーンで、知的な交流を楽しむことができた。週末ごとにどこかしらでパーティーが開かれ、若く貧しい文筆家、写真家、絵描き、デザイナーなどは、そこへ行けばただで食事を食べ、編集者に声がかげられ、ちょっとした仕事にありつくこともできた。

けれども、そこは落とし穴があったようだ。好景気の時代にニューヨークに住んでいた芸術家志望の若者たちは、週末にあまりに多くのパーティーに招かれ、本当はしたくもないけれども、払いは実にいい多くの仕事の提案を引き受け、金を手に入れるために、その気もないような仕事と人脈に手を染めてしまう。あるいはまた、たとえ結婚していてもパーティーで出会った若い女性とかりそめのロマンスに走ってしまう。それが、1920年代のマンハッタンだった。

こうしてみると、1920年代に野心を持ってやってきた芸術家たちや書き手たちが、おそらくはかなりの成功も経験したであろう中で陥っていった孤独の内実が、具体的にわかってくる。20年代のニューヨークに連帯がなかったわけではない。そしてまた、20年代のニューヨークに、うるわしいロマンティックな関係がなかったわけではなかった。それどころか、むしろ逆であったようだ。人々は、気楽に、初めて会う他人と連帯の感情を持つことができ、そしてあまりにも気楽に、ロマンティックな関係に陥ることができた。それが20年代の現実を生きたカウリーの描写するニューヨークである。ビジネスによってつながり、仕事がいくらでも回ってくる関係の中で、彼らは連帯を結び、特にしたくもない仕事に手を出し、特にしなくてもいいような恋愛関係に陥る。そして目の前のいたるところに転がっている儲け話と浮気心にのせられたはいいいものの、いつのまにかその気楽な連帯とロマンスの罠から抜け出せぬまま、彼らはつまらない仕事に才能を搾り取られ、本当は愛してもいない相手との恋愛に疲れ果て、追い詰められ、内面をむしばまれ、そして孤独の中で破滅して行く。そのような状況の中では、たとえ真に才能がある芸術家であっても、いや、あるいは本当に才能があり、魅力にあふれていればいるほど、彼らは追い詰められていくことになるだろう。こうして、ゼルダ・フィッツジェラルドが言ったように、若く才能ある芸術家たちは「他のくだらない人々と同じように、追い詰められ、途方に暮れてしまう」ことになってしまった。それこそが、20年代のニューヨークが、野心にあふれた才能ある若者に与えた都会の皮肉なシステムであった。

うまくいっているうちは、彼らは経済的に独立し、恋愛はしても一人の恋人に縛られない、ニューヨークの1920年代に実現した都会的な自由を謳歌する、最先端の人間としてやっていけたらう。しかしそんな関係は、それを支えていた右肩上がりの株式市場という経済的な基盤を失うと、あつというまに崩れていく。彼らは虚ろな内面を抱え、信頼すべき関係を失った自分を見出す。20年代のニューヨークでは、いわば安直な連帯が連帯を破壊してゆき、そして軽薄なロマンスがロマンスを壊してゆき、信頼できる持続的な連帯や、成熟した個人を作り出す土壌となる愛情のある関係が掘り崩されていった。そしてカウリーが言うように、1920年代の都会的な生活は、成熟した個人主義を生み出すことに失敗してしまったのである。

結論

カウリーの *Exile's Return* は、1920年代に確立された都市のシステムがどのようなものであり、芸術家がニューヨークで陥る運命がどのようなパターンを示すかを現実的に検証し、解明したテキストであった。その後のニューヨークを舞台とした文学の多くも、この、後戻りすることのない都市のシステムの中において、個人の成熟と持続的な連帯は可能であるかという、困難な問いを繰り返し問いかけている。

*本研究は JSPS 科研費 JP21K00357 の助成を受けたものである。